

1. 明治期のキリスト教～成長期と伝道不振の時代

- キリスト教禁制の高札が撤去され、1874年から1890年までの16年間は、日本のキリスト教界は大きな飛躍を遂げた。
- この時期は欧化主義全盛で、「鹿鳴館時代」と呼ばれる。
- 多数の宣教団が来日、様々な教派の形成、神学校設立、教派を超えた伝道や教会形成の協力、聖書翻訳や賛美歌の歌集の作成。
- 1880年代におけるリバイバル。
- 政府のキリスト教に対する態度も一変。外務大臣の井上馨は宣教師や牧師を招待してキリスト教に好意を示し、伝道上の便益を図ることもしました。福沢諭吉もこれまでの反キリスト教的態度を捨て、キリスト教を国教にすべしと主張するほどの変わりざま。
- この後に続く時期は、一転して極度の不振の時代。
- キリスト教史家である山路愛山はこの時代のキリスト教を次のように述べている。

「基督教会振わず

此の如く日本の基督教会は内は神学の争論に疲れ、外は教育家の排斥に逢い、遂に全く不振の状況に陥れり。かくて明治二十五年以後の基督教会は其進歩殆ど見るに足るもの無く…。実に日本の基督教会は最近十五、六年間殆ど進歩の兆候を見ざるのみならず、総ての点において其衰弱を現せり。」

① 天皇制の確立とキリスト教一不敬事件を中心として

- 明治政府は国民を束ねていくための精神的支柱を必要とし、天皇制とそれに結びつく国家神道とした。
- この天皇制国家主義政策の総仕上げが、1889年2月11日に発布された大日本帝国憲法（明治憲法）と、翌年の教育勅語。
第一条「大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す」
第三条「天皇は神聖にして侵すべからず」
第二八条「日本臣民は安寧秩序を妨げず臣民たるの義務に背かざる限りにおいて信教の自由を有す」
- 1890年10月30日に教育勅語が発布。内容は、天皇中心の国家主義と仁義忠孝の儒教論理を根本にしたもの。
- 1891年1月9日に第一高等中学校で行われた教育勅語奉読式において、当時囑託教員であった内村鑑三は教育勅語への最敬礼をせず、頭を下げたのみだった。その結果、生徒や教員、ジャーナリズムなどから、不敬行為として攻撃された。
- この問題は内村個人の問題に留まらず、世論はキリスト教に対する非難として広がった。東京帝国大学の哲学科教授井上哲次郎は、キリスト教は伝統的習俗や教育勅語の精神に合わないものであると激しく非難し、仏教徒たちも各地のキリスト教徒の不敬事件を誇張して取り上げた。これに対して、キリスト教界側も植村正久や柏木義円らが反論したが、大多数の国民の目には、キリスト教が反国体的宗教であるというイメージが形成された。

② 自由主義神学流入による混乱

- キリスト教界の内側では神学問題が生じ、教会内に混乱がもたらされた。
- 1880年代の後半からドイツやアメリカから「新神学」と呼ばれる自由主義神学が伝えられた。

- 聖書の靈感を否定し、聖書は神の言葉ではないと主張された。代わりに科学的に聖書を研究することが推奨されました。また、三位一体論が否定され、イエス・キリストの神性も否定され、ヒューマニズムに基づくキリスト教研究が唱えられた。
- 特に影響されたのは熊本バンド出身の人々で、彼らはもともとジェーンズの合理的・自由主義的な信仰を受けていた。
- 植村正久（日本基督教会牧師）と海老名弾正（日本組合基督教会牧師）の間でイエス・キリストの神性をめぐる論争が起きた。キリストを神として信じるのか（植村）、それとも教師であるキリストの信仰にならうのか（海老名）で意見が分かれた。福音同盟会第12回大会の決議によって、植村の信仰理解がキリスト教界において一応公的に認められた。
- 明治期最後の重要な出来事として、1912年2月25日に開かれた三教合同。
- 社会主義・無政府主義の勃興や経済的不況による社会不安の対策のために、政府が神道・仏教・キリスト教の三教に呼びかけて開催した合同。
- それぞれの教義を発揮し皇運を扶翼し国民道徳の振興を図らんことを期すと決議し、キリスト教が神道・仏教と対等に国家から扱われたとして、多くのキリスト者は喜んだ。

2. 大正時代のキリスト教

- 明治期の国家主義とは異なる民本主義思想、普通選挙運動、婦人参政権運動が起こり、理想主義、教養主義、文化主義等の個人主義思想が流行。
- 信徒の社会層は都市の知識層に集中する傾向が顕著となり、この時代の教養主義・文化主義を反映した。
- 全国協同伝道（1914-17）が行われ、日本のプロテスタントの教会数は1910年の568から1920年には1505へと増加。
- キリスト教は当時の社会に様々な影響をもたらした。来日した宣教師が関わった例としては、ベリーによる監獄改良運動、バチュラーによるアイヌ施療室、リデルによるハンセン病患者救済と熊本回春病院の開設。日本人キリスト者では、原胤昭たねあきによる監獄改良、留岡幸助による非行少年の感化救済（巣鴨「家庭学校」の設立）、石井十字による岡山孤児院、石井亮一による発達障害児教育、救世軍による廃娼運動や生活困窮者支援の社会鍋、足尾銅山の鉱毒事件への関わり、キリスト教社会主義の運動として片山潜、賀川豊彦など。

3. 昭和期（戦後まで）のキリスト教

① 戦時下の教会への迫害・弾圧

- 1931年の満州事変以降、国家による宗教に対する干渉はますます強くなった。
- 1932年、上智大学予科の学生数人が靖国神社参拝を拒否する事件。
- 神社参拝強要は朝鮮のキリスト教会に対しても行われた。
- 1939年、宗教団体法が成立し、翌年から施行。これによりキリスト教界は再編を迫られ、特に多数の教派に分かれていたプロテスタント教会の場合は一つにまとまることになり、三十余派が合同して日本基督教団が成立。
- その綱領には国体の本義に徹し大東亜戦争の目的を完遂に邁進すべしなどとあり、戦争遂行へ協力を表明。
- ホーリネス弾圧。1942年6月26日、ホーリネス系の教職者が治安維持法の違反の嫌疑で一斉検挙された。再臨の強調と千年王国の教義が天皇の統治権を否定し国体変革を企てる危険思想で

あるという面と、伝道熱心なホーリネスを叩くことで他に対する見せしめという面もあった。「一罰他戒」。

- 一斉検挙の後、教団は自分たちに災いが及ぶことを避けて、彼らと自分たちの違いを強調し、何人かの教団の幹部は当局による逮捕を英断として歓迎した。

「此の度の国家としての御処置は実に大英断であって、自分ながら喜んでいる次第であります。彼らの熱狂的信仰は我々教団では手の下しようもないくらい気違いじみているため、これを御当局において処断して下さったことは、教団にとり幸いであつた。」

② 教会の戦争協力と戦時下での抵抗

- 1942年に日本基督教団は「戦時布教方針」を發表し、進んで国策の遂行に協力することを謳い、富田統理の伊勢神宮参拝、愛国機献納の決議、宮城遥拝、勅語奉読、戦没者への祈念、軍需工場で働く勤労報国隊を牧師が編成、皇国日本に奉仕する神学研究などが行われた。
- 日本基督教団はアジアの諸教会に対する「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」
- 戦時下における数少ない抵抗の例として矢内原忠雄。矢内原は内村鑑三門下の無教会キリスト教の一人で、東京帝国大学の教授。日中戦争の最中に行なった「神の国」という講演で、矢内原は国家の政策を批判し、日中双方に対して速やかに戦いを止めるよう語りかけた。その後、矢内原は退官を余儀なくされた。

4. 戦後のキリスト教

① GHQの政策によるキリスト教に対する追い風

- 1945年8月15日にNHKラジオの正午の時報に続き、「君が代」がレコードで流れた後、いわゆる玉音放送が流れ、ポツダム宣言の受諾が告げられた。
- 8月30日、アメリカのダグラス・マッカーサーが連合軍最高司令官として厚木飛行場に降り立ち、9月6日、アメリカのトルーマン大統領からマッカーサー宛に日本の宗教や思想活動について次のような指示があつた。

「宗教的信仰の自由は、占領と共に直ちに宣言せらるべし。…人種、国籍、信教又は政治的見解を理由に差別待遇を規定する法律、命令及び規則は廃止せらるべし。」

- 「人権司令」…戦前の特高警察の廃、治安維持法、宗教団体法の撤廃。
- 「神道指令」…国による国家神道の指示・支援の禁止。伊勢神宮や靖国神社は一宗教法人となつた。この結果、教育機関による靖国神社をはじめとする神社参拝行事は禁止され、ミッションスクールはそれまでの重圧からようやく解放された。
- 教育勅語は廃止され、天皇・皇后の御真影やそれを奉る奉安殿も撤去された。
- 1946年1月に昭和天皇が人間宣言。天皇自ら神格化を否定しました。
- 日本の非軍事化・民主化の総仕上げが、11月のに發布された日本国憲法。
- 「神聖不可侵の現人神」とされていた天皇が、国民の総意に基づく象徴天皇とされた。
- 憲法第20条においては無条件の信教の自由と政教の分離が明確に宣言された。
- マッカーサーは聖公会の熱心な信者であり、日本が共産主義から守られ、民主化されるためにはキリスト教化以外に道はありえないと強い信念をもち、日本に宣教師たちが入ってくることを積極的に支援した。

- 日本の支配者層は、マッカーサーに代表されるGHQの意向を敏感に感じ取り、キリスト教に対する従来の態度を豹変させた。
- キリスト教会の有力な指導者であった賀川豊彦が東久邇宮内閣の参与に就任し、無教会のキリスト者である南原繁が東京大学の総長に就任し、南原の後を継いだのがさきほどの矢内原忠雄。1947年には新憲法に基づく初の衆参の選挙が行われ、社会党を中心とする連立内閣が成立し、内閣総理大臣に就任した片山哲と衆議院議長を務めた松岡駒吉は富士見町教会に所属するキリスト者。皇室がキリスト教と接近したのもこの時期で、1946年4月30日に、植村環一父親は植村正久一は、戦後民間人として初めてアメリカに渡り、翌年帰国して、毎週皇后に聖書を講義するようになった。また、天皇自らが、皇太子（現在の上皇）の家庭教師として立派なクリスチャン婦人を希望し、その結果、クエーカー教徒であったエリザベス・ヴァイニングが選ばれた。

② 戦後の精神的な空洞

- キリスト教ブームは外面的な力だけでは説明できない。
- 敗戦によって、日本の伝統的な思想や宗教に失望し、また、天皇制という思想を否定されて、いわば精神的に「真空状態」に陥っていた日本人に、キリスト教が非常に新鮮なものとして映ったというのも否定できない。

戦国時代	開国期	戦後
信長、秀吉が天下統一のために利用できるということで、キリスト教を保護	欧米に追いつき、富国強兵のために欧化主義政策を取る一環で、キリスト教も好遇された	GHQがキリスト教を好意的に捉えていたので、政府もそれに倣った
既存の宗教である仏教が政治の具と化し、魅力を失っていた。宣教師たちが命をかけて語るキリスト教に新鮮さと力強さを感じた	鎖国状態から開国し、キリスト教の教えが新鮮であったこと、また、幕府側の士族階級は立身出世の望みを絶たれていた中で、キリスト教が自分の生きる目的、また、国家を建て上げる土台となることを見出した	天皇制が否定され、戦後の混乱状態の中で、生きる希望や指針をキリスト教の中に求めた

③ 60年代以降のキリスト教

- 1960年代…ビリー・グラハムの伝道大会、本田弘慈によるクルセード伝道
- 1970年代…学生紛争、大阪万博をめぐる教会内の対立。
- 1980年代…天皇の代替わりに関わる問題
- 1990年代…阪神淡路大震災でのキリスト教会が教派を超える協力、オウム真理教事件での宗教に対する恐怖感。
- 2000年代…政治的な動向に対するキリスト教会のレスポンス